

第17回 環境ボランティアリーダー海外研修報告書

NPO法人 アキハロハスアクション 高林麗果

① 訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を日本のボランティアリーダーとして生かせるか。

今回、訪問させて頂いた団体の活動で、日本でも取り入れられるヒントが多々見つかった。学んだことを踏まえ、重要であると思う点をまとめた。

「ドイツの2大NPO、NABUとBUND」

ドイツには、NABUとBUNDという会員数が45万人を越える環境保護（BUND）や自然保護（NABU）に特化する大きな団体がある。会員ネットワークは実に濃いもので、自然を昔のように戻していきたい、ありのままの自然環境を取り戻していきたいと思う団体の昔から受け継がれてきた志が政治をも動かすことに衝撃を受けた。

各団体が未だに大きくなる理由には必ず戦略が隠されている。そこで、2つの団体を大きく動かしているものは何か、項目ごとにあげ、リーダーとして生かしていけることを以下の6つのカテゴリに分けて記していく。

1・「中心となって活動しているメンバーが先頭を切り情熱を持って活動していること」

組織が存在するということは、リーダーシップという役割を担う人物が必ず必要である。様々なプロジェクトが存在する中でも、今回訪問したラインナウアー自然保護センター代表のロバート・エーゲリングさんやヘッセン州の自然保護センター所長であるゲルハルト・エプラーさんは子どもや大人が自然に親しみを持てる入口を提供している。エプラーさんは自分のライフワークの一つとして自然保護センターを設立した。二人とも、各州でリーダーシップを発揮しているNABUには欠かせない人物である。野鳥保護、巣箱の設置や子どもたちが自然体験できる環境、どれも自分の自慢のように話をしてくれているところを見ると、この活動が“好きである”ことがよくわかる。リーダーシップをとる人はまず自分自身が行っている活動が好きで、それが魅力となることで地域からも受け入れられる存在につながると考える。

日本の小さなNPO団体でも、いかに情熱を持って好きなことをしているかで人や活動の魅力につながり、そこから輪が広がっていくと思う。制度や仕組みも、もちろん大切だが、上記で述べたことは組織が大きくなる根底であると考えられるため、日本のボランティアリーダーも自分が行っている活動を

喜んで自慢できるようになるべきであると思う。そしてNPOの顔であるリーダーのファン作りはとても重要であることを再確認できた。

2・「地域のネットワーク作り」

地域への理解は日本でも課題の一つとしてあげられる。NABUもBUNDも各州ごとに支部が設けられ、細やかなネットワークが存在するからこそ会員数の拡大や地域活動の基盤がしっかりと根付いているのだ。

NABUの会員でもあり、ラインヘッセン地域N a h eでの支部を担当しているミシャルスキーさんは地域のネットワーク作りを丁寧に行っている、そんな印象を強く受けた。N a h eは、小さな町ではあるが、1日に30件もの相談（鳥のひなが落ちてしまったなど）がくるということだ。その対応もミシャエルさんがするとのこと。こういった小さな地域でコミュニケーションを大切に、信頼を築くことは例えば土地を活動目的で使わせてほしいときにアプローチができ、時に協力してもらえる最大限の味方になるため、とても重要であるということだ。

NPOを拡大する目標があってもまずは身近な地域への信頼を固め、協力をしてもらうことが必要であると思う。ここでもリーダーとしての顔を知ってもらい、地域の方からは身近な存在でなければならないと思う。

3・「諦めずに挑戦する。しかし振り返ることも忘れずに」

NABUもBUNDも年間45万人の会員数であることはそれだけ有効な広報戦略があるということである。しかし、資金調達も会員集めも全てがうまくいくわけではないと思う。

今回学んだ広報活動のポイントは1・メディアの力2・HPの開設、更新をまめに行う3・効果的なパンフレット、チラシの作成4・ロビー活動への参加の4つだが、このポイントから読み取れるものは、方法は一つではないこと、諦めずに挑戦することだ。そして、何度か実践してみて何がいけなかったのか問題を明確にし、どうしていったらよいのか、振り返り次に進むことはその団体が進歩するカギになるため、私も多様な方向性を考えながら実践していこうと思う。

4・「感謝の気持ちを大切に」

信頼関係を作るにはやはり感謝の意を表すこと。継続した会員を確保していくためには、会員を満足させることもとても重要であると思うが、寄付してくれた人に対して「ありがとう」の気持ちを伝えることが次につながるポイントになることを学んだ。私は今、クラウドファンディングを始めている

が、寄付してくれた人が身近な人であるとわかったら、必ず応援してくれていることに「ありがとう」と伝えようと思っている。そしてもう一つ、言葉で伝えることにプラスしてありがとうカードのようなものを作成し、手に取って感謝の意が伝わるものを取り入れていきたいと思う。

ファンレイジングは、本当に地道な取り組みであると日々実感しているが、ドイツで学んだポイントのほかに、どのようなアプローチをしたら人の心をつかめるのか、前向きに考える気持ちが次のアクションにつながると思う。

5・「継承していく人材を育てることも私たちの役割」

継続的な資金調達、団体を運営させていくうえでもかなり重要であるが、それと同じように団体には同じ思いを持った人がいないと継続していけない。各団体を運営してく上でのミッションというものは必ずあり、方向性を受け継いでいくこともリーダーの役割であると思う。ドイツの人材を育てるべく研修制度F O J（興味のあるNPOや企業、州によっては行政に1年間研修に行ける制度。給料は出ないがおこずかいがもらえる）これは私たちのようなNPOの思いを若い世代に繋げていくとても良い手法であると思う。この研修制度を日本版にし、実践していきたいと考えている。

6・「他の公立、私立ようちえん・保育園との連携で保育の概念を変えていく」

今回、ドイツで3つの森のようちえんに伺い、どのようちえんもやり方はさまざまであったが共通して言えることは“自然というものがお母さんのように、子どもは大きな自然に見守られている”こと。自然に心を許し、ありのままの素直な気持ちで自然と接する子どもを見ていてそのように感じた。日本では子どもを森のようちえんに入園させたいと思っている保護者が増えてきているが、仕事をしている、送り迎えが大変などとハードルが高く入園を諦める方も少なくはない。環境教育は大切、子どもが自然の中でのびのびと過ごす時間を増やしたいと思ってくれているのに、活動が身近でないことに少し矛盾を感じてしまう。ドイツのA l z e y森のようちえんのように、公立、または私立のようちえんに自然教育プログラムを取り入れることも一つの方法であると考えた。自然の中での保育をより多くの親子へ伝えて行き、自然保育を取り入れることへのハードルを低くできるよう、来年開園する森のようちえんをモデルとし、アドバイスしていく立場を担っていきたい。

また、ボランティアリーダーは、自分たちの活動や他の団体の良さを人に伝え、協力し合っていくリーダーでもあると思う。ドイツの行政とNPOの協力体制と同じようにまずはNPO同士で力を出し合い、パワーあふれる社

会を作っていくことが市民活動を活性化していく一歩であると思う。

② 研修を通して、日本の環境ボランティアリーダーを支援するために、どのような仕組みが考えられるか。

ドイツで学んだF O J（環境ボランティア研修制度）が日本にも普及していけば、相互にとって良い影響力をあたえるのではないかと考える。今現在、私がいる団体でも週に1度の割合で子育て支援センターと森のようちえん、森のしょうがっこうプログラムにボランティアに来てくれる学生がいる。その多くは「自然に興味があるから」「森のようちえんで将来は働きたいと思っている」といったように自然教育に思いのある人たちであり、自然教育にスポットが当たるようになってから年々増えてきているように思える。興味を持っている若者をF O Jのような形で受け入れることができれば、自然教育の人材育成がスムーズに行われるし、自然教育を広げていけるための人材育成につながる。受け入れる側は目的を明確にし、ルールや理念の理解してもらわなければならない。また、ボランティアであっても、交通費のほかに報酬を出し、責任とやりがいを感じてもらうことも大切である。特に、受け入れ側が研修生を安い労働力だと捉えないよう人材育成としてのプログラムを提供していくことが必要であると考えます。

どのような方向性でアプローチしていくかは考え中であるが、できれば来年、森のようちえん開園の際に実施できるように、現在のボランティアの事例とニーズを説明し、少しでも補助が出るように行政側に相談をしてみようと思う。

③ 全体を通しての感想

初めての海外。緊張もあったが、環境先進国といわれるドイツの森のようちえんを訪問できることが本当に楽しみであった。開園準備を進めているとどうしても視野が狭くなり、“開園する”ことだけに意識が行ってしまっていたため、開園する森のようちえんをどういう方向性で進めていきたいか、もう一度考えさせられる本当に良い機会であったと思う。自身の森のようちえんに対する視点が大きく変わった。

訪問した3つの森のようちえんに共通していえることは、まず子どもたちが本当に生き生きとし、ありのままの気持ちで遊んでいたことである。国を越えても子どもは変わらないのだな、と嬉しい気持ちになった。

来年、開園予定の森のようちえんとドイツの森のようちえんを重ね合わせて見ていると、ピンとくるものがあつた。それは、ドイツで学んだ生物多様性である。「昔に返す」というドイツの環境保護のやり方、これはすぐに日

本のようにちえんでも取り入れられると思ったのだ。虫のホテルや、動物たちの隠れ家づくり、野鳥の巣箱等、自然と共生していくこの環境教育の原点を、必ず開園するようちえんで実践していくと決めた。

そしてもう一つ、自然の中での幼児教育は森に限らず、その土地のありのままの自然を活用していくスタイルも考えられるということだ。森でも良い、里でも良い、その土地の自然と共生し、生きる力を育むようちえんが存在するとしたら、自然体験ができる幼児教育の場として、より受け入れられ、よりニーズが増えると思う。

研修後のメンバーとの振り返り、この時間は貴重な学びの場であった。特に私が今現在抱えている資金調達の問題、「誰のための森のようちえん？」「新潟を好きになるようちえんを作ってそれからどうしたいの？」「資金調達はまずは目的を明確にしないと」と本当に親身になってアドバイスをしてくれた。わかっているのに、行動に移せていない、こんなことも知らなかったのかと情けない気持ちにもなったが、自分の弱いところを素直に相談することができたことも今回の研修での実りとなっている。

私の夢であった、森のようちえん開園は残すところあと5か月である。今回、ドイツ研修で得たことをもう一度整理し、良いと思ったことは即行動に移していきたい。

そして来年の4月からは、三条市の素晴らしい自然環境で子どもたちがのびのびと過ごせるようちえんになるよう、頑張って準備を進めていきます！

最後に、環境ボランティアリーダー研修はセブン・イレブンさんのお客さまからの温かい募金活動で行かせて頂いています。感謝の気持ちを忘れずに、必ず日本の環境教育に革命がおこるような森のようちえんづくりをしていきたいと思えます！

ありがとうございました。

以上